

平成九・十年度

# 塚原歴史調査報告書

新湊市立塚原公民館

塚原歴史の会



## 序にかえて

塚原地区の歴史については、今までに「塚原村資料」（塚原小学校所有）と「塚原村沿革史」（奥村清蔵著）があり、「茶のんばなし」や「石仏調査」等がある。しかし、地域史として時代や事項についてのまとまったものが編纂されていない。

市内の各地区の歴史書についてみると、戦前には、堀岡村史、本江村史、片口村産業組合史が発刊されており、戦後には七美村、作道村の地域史が作成されている。また、海老江地区の歴史、庄西地区の歴史についての編集も現在進行中であると聞いている。新湊町の歴史は、新湊史談会で発行されており、史書を持たないのは塚原地区だけである。これは、寂しいことであり、地域の史書を作ることが現在生を受けている私達の責任であると考えられる。

戦後五十余年、大きく変わる時代になり、「十年一日」の時代でも、「十年一昔」の時代でもなくなつた。変化の急テンポは、私達の周辺から多くのものを失わせ、多くのことを忘れさせ、過ぎ去つた日々との繋がりを薄めようとしている。

集落で、家庭で、語り継がれていたことも次代に語り継がれなくなろうとしているし、語り継がれたことを語る人達も次第に少なくなつてきているのが現状であろう。

戦後、経済的に豊かになつて、殆どの家が改築され、その家に所蔵されていた多くの文書類が破棄されたり、燃やされたために、古い時代を知る手掛かりも次第に失われるようになってきた。

こうした多くのことから、私達は、「次代へ残す史料を集めよう、出来れば塚原村の地域史を作成できたらいいな。」と、この会を発足させたのである。

地区内には、文書類や絵図等が人に知られず眠っているものがあると思われる。そうした史料が、私達の「史料を次代に残したい」「塚原の歴史としてまとめたい」という活動を推し進める力になるのである。史料についての情報を寄せていただき、私達の活動に協力をお願いしたい。

# 目次

発刊にあたって

序にかえて

塚原の歴史の会活動報告……………1

## 一、青木山覚円寺

(一) 覚円寺由来書……………4

(二) 持浄

持浄略歴

持浄資料

(三) 藪波浄慧

事蹟

塚原と浄慧

二、高木山覚正寺……………15

(一) 高木山略縁起

(二) 覚正寺由来に付書き上げ

## 三、古老に聞く

(一) 川口……………19

院内から発掘された阿弥陀如来像

諏訪木神社の元朝祭と祭礼

塚原村に関する資料

(二) 朴木……………21

朴木焼と木工品

蘭草・花ござ

(三) 冲塚原……………23

福禱社

ダント場

ハカンド

付 塚原に関する資料……………25

あとがき

会員名簿

# 活動報告

平成

八年

塚原の歴史の会(火)の発足について  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

これからの塚原の歴史の勉強会について  
活動方針・案内状・会場所・資料集めなどの打ち合わせ

(塚原公民館)

平成

九年

塚原の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

塚原の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

由緒書の歴史の会(火)の勉強会、お寺回りについて  
午後七時三〇分

(塚原公民館)

平成一〇年

会費について

午前九時

(宮袋禅楽寺)

宮袋禅楽寺の訪問

午後七時三〇分

(塚原公民館)

宮袋禅楽寺の報告

午後七時三〇分

(塚原公民館)

川口一〇月二日

午前一〇時〇〇分

(川口谷昌寺)

瑞龍寺の見学

午後七時三〇分

(塚原公民館)

川口一〇月二日

午後七時三〇分

(塚原公民館)

今年二月五日

午後七時三〇分

(塚原公民館)

今年三月六日

午後七時三〇分

(塚原公民館)

今年四月八日

午後七時三〇分

(塚原公民館)

今年五月十日

午後七時三〇分

(塚原公民館)

今年六月十二日

午後七時三〇分

(高木秋生氏宅)

今年七月十四日

午後七時三〇分

(塚原公民館)

今年八月十六日

午後七時三〇分

(塚原公民館)

平成十一年

各集落の古老からの聞き取り訪問打ち合わせ(朴木) 八月二十九日(土) 午後七時三〇分

(朴木公民館)

朴木の古老からの聞き取り訪問 八月二十九日(土) 午後七時三〇分

東石直蔵さん 舟木喜作さん 村田勇義さん 午後七時三〇分

(塚原公民館)

各集落の古老からの聞き取り報告についで(沖塚原) 午後七時三〇分

(沖塚原公民館)

沖塚原の古老からの聞き取り訪問 午後七時三〇分

(塚原公民館)

沖塚原の古老からの聞き取り報告についで 午後七時三〇分

(塚原公民館)

各集落の古老からの聞き取り訪問についで 午後七時三〇分

沖塚原の古老からの聞き取り報告についで 午後七時三〇分

(塚原公民館)

次回の古老訪問についで 午後七時三〇分

(塚原公民館)

調査書作成 一月二十七日(水) 午後七時三〇分

(塚原公民館)

調査書作成 二月一日(水) 午後七時三〇分

(塚原公民館)

調査書作成 二月五日(木) 午後七時三〇分

(塚原公民館)

調査書作成 三月三日(水) 午後七時三〇分

(塚原公民館)

# 一、青木山 覚円寺

## (一) 覚円寺由来書

覚円寺の開創は、およそ八百年前にして臨濟宗国泰寺に属し、その後、蓮如上人に帰依して改宗し、現在には真宗本願寺派に属する。

旧記によれば、和尚大徳（開創者）は、二上山の麓から三島野の庄内朴野に隠居するとある。

歴代 年 号 (西 歴) 月 日 時 項

初代

了円 寛正 二年 (二四六一)

元和 六年 (二六二〇) 五・二二

蓮如上人に帰依して覚円寺創立(もと真言宗)  
蓮如御影下附さる(准如裏書)

宗悟 寛永 一八年 (二六四一)

慶安 一年 (二六四八) 九・一九

宗祖御影下附さる(良如裏書)  
覚円寺上洛、木仏本尊を望む。  
太子七高僧を願ひ御礼銀を納む。(取次、八木蔵人周)  
年号なきもここに収む。

二代 乗専

承応 二年 (二六五三)

寛文 五年 (二六六五) 八・二〇

貞享 二年 (二六八五) 一・一七

願海寺下覚円寺宗悟、衣袴御免御印書を受く。  
覚円寺絹袈裟御免、願主乗専 (取次、下間少進法眼)  
太子七高僧絵像下附、願主乗専 (寂如御裏)  
覚円寺由緒書上、寛正二年了円建立とある。



三代 乘意 正徳 一年（二七一） 六・九 前住良如影像下附、願主乘意（寂如御裏）

享保 一年（二七一六） 一・一 覺円寺前住乘專寂（推定九十才）

同 六年（二七二一） 五・七 宗祖御絵伝下附、願主乘意（寂如御裏）

寛延 三年（二七五〇） 三・二三 乘意寂（推定九十三才）

四代 乘專 安永 八年（二七七九） 七・二一 覺円寺四代乘專寂（推定約六〇七十才新発意映騰三十七才後住）

映騰 同 八年（二七七九） 九・二三 覺円寺及門徒代表四名連名にて高岡称念寺へ映騰の後住を願い出る。

同 九年（二七八〇） 三・四 覺円寺新発意映騰歿三十八才

五代 乘応 寛政 七年（二七九五） 二・七 乘応寂（推定五十二才）

六代 乘忍 同 八年（二七九六） 一・一 覺円寺持浄（十四才）氷見尺伸堂義霜に入門。

文化 一二年（二七九九） 一・二 浄応弟乘意没（前住後見）

一二年（二八一五） 二・二 乘忍寂（二十五才）

七代 随念 （略歴別記）  
八代〜二十代（略）

二十一代  
青木深念  
(持浄)

二十二代  
青木法道

二十三代  
青木法静

現住

青木哲静

(二) 持浄

持浄略歴

天明 三年 (二七八三)

寛政 八年 (二七九六)

文化 十一年 (二八一四)

戸出報恩寺に誕生

氷見西光寺尺伸堂義霜に入門

八・二八

先住乘忍之舎弟、乘意之新発意、十八才歿 (法名不相知)

一・二・一七

乘応、乘意、二代の坊守、釈乗誓歿

二・二

覚円寺十七世先住乘忍寂二十五才

五・

戸出報恩寺先住舎弟随念 (持浄) 朴木覚円寺入寺、住持相続、三十三才

五・四

覚円寺養子新発意持浄、今日依願新発意披露御礼相済、寄合所より

五・五

覚円寺持浄後住相統仰付らる

五・五

持浄後住に付、御録所上之門徒一総門徒帳 一六六軒

文政 一二年（一八二九）

覚円寺新宝浄、氷見西光寺尺伸堂義霜に入門

天保 二年（一八三一）

覚円寺随念、学林懸籍、再入九夏

同 四年（一八三三）

広如宗主、染筆六条尊号（五十代）を随念に下附さる。

（取次 下間少進）

同 七年（一八三六）

四・八  
新発意浄念、学林懸籍

九・

竺宝浄（持浄の子）随聞雜記を認む。

随念、学林続籍、此年迄入満、助教となる。

同 九年（一八三八）  
同 一四年（一八四三）

三・  
覚円寺「寺格並御免物等人別書上帳」を認む。

七・一四

学林役所参事慈恩、看護玄雄、持浄の篤学を御本殿聞召され御召状を下され上京仰付けらる。

覚円寺新発意乗念、学林続籍、八夏

嘉永 二年（一八四九）

二・六く 二・一一く

看護助教持浄、学庠役所に「広文願」を講ず。筆密巖「広文願嘉永録」

（水戸田 西方寺蔵）

三・ 達書

江州高島郡末寺中門徒中へ御用番鳴田兵衛権大尉より、御法義引立とし

て看護持浄差向けられる。 公文願嘉永録（水戸田 西方寺蔵）  
七・達書各通

御用番下間少進法印より越中末寺中門徒中へ、戸出報恩寺放生津円徳寺  
某所西光寺（氷見か）学業引立として助教持浄差し向け。  
（論田 願正寺蔵）

嘉永 四年（一八五二）

一・ 本山学林より国（越中国）内懸籍取締掛仰付ける。  
（金屋 光照寺蔵）

九・一〇

持浄、司教を拝命す

同 五年（一八五二）

寒講中・覚円寺志行（持浄次男）曇華窟規定七条を含め。  
曇華窟勸学序を附す。持浄上京

八・一五

司教持浄、勝興寺対面所にて、御前講義筆、義浄「御袖須閑李御章聴記」

（論田 願正寺）

同 六年（一八五三）

四・一六  
持浄、学林副講に高僧和讃を講ず、筆義浄

同 七年（一八五四）

二・九

安政 元年（一八五四）

司教持浄老師、自坊に於て浄土分類聚鈔大綱議論の判者となる。  
筆持玄（覚円寺）

三・五（一五）

持浄「御歳断御書」を勝興寺に講ず。筆市井随浄

（市井 光照寺蔵）（大巖筆 二塚 浄誓寺蔵）

四・二〇（三〇）

放生津長栄寺において持浄「御殿試問論題」を講ず。筆義浄

(御殿試問御論題聴記)(論田 願正寺蔵)

秋

覚円寺宝浄(随念子)経蔵創建の「聖教序」を記す。

七・二四〜八・二七

計四十席今石動尊光寺において、正信謁を講ず。

「正信謁安政録」(二塚浄誓寺蔵)

同 三年(一八五六)

夏

安居副講に「安塵還源観」を講じ、あと安塵還源観丙辰講三巻を自筆にて記す。(覚円寺、龍谷大学図書館蔵)

(竺、密巖筆受、於直宗学庠、安鹿還源観聴記、水戸田 西方寺蔵)

夏

広如宗主諸国の篤学僧侶を召して学林に応試せしめ。

秋

広如宗主持浄に命じて、家臣の為に宗祖伝を講説せしむ。

一〇・一三 発京 一〇・二二 帰村

一〇・二四より風邪にて百六十日病床に臥す。

御伝記丙辰講再治奥書自筆(覚円寺蔵)

一・二八

覚円寺十九世乗念(持浄子)子深念寂四十一才

晩秋

円徳寺桂成の所望により「一、仏法には……」の一幅を書す。

一二・二三

持浄入寂 七十七才

八・一五

明治二〇年(一八八七)

持淨資料

杏山執行長日野沢依より達しあり。  
「在生中後学教育の功不尠、持旨を以て勸学職追贈相成」とあり。

故

司教持淨

贈勸学職

明治二十年八月十五日

達

越中国射水郡朴木村

覚円寺

其寺先代故持淨義存生中後学教育ノ功不尠候ニ付今般特旨ヲ以勸学職追贈（贈）相成候条此段相達候事

明治二十年八月十五日 執行長 日野沢依

丹冊（たんざく）

得業密厳呪ののりの場をいはいて

春雨とふりつゝ法にそゝかれて

しつしつふるふ庭の民草

持淨

得智干内物安於外

(智を内に得れば、物外に安らかなり)

曇華窟持浄書

一、仏法には萬かなしきにも

かなわぬにつけても何事

に付ても後生のたすかるへき

ことを思へはよろこび

多きは仏恩なりと云々

此文依円徳精舎桂成賢衲所望

年七十八

安政六年晚秋日曇華司教持浄書之、

年七十七

随念は全国各地に出向き修行し、心身に磨きをかけ徳を修め、その後文化十六年(一八一五)三十三才で覚円寺の第十七代住職となった。持浄は、自分の修めた学問を広めるため私塾「曇華窟」を開き、県内はもちろん、越後の国からも門弟を集めて、二百五十人以上の僧に仏の道やいろいろな学問を教えた。また、勉強に使った本が数千冊にもなり、その識見の高さは北陸各地に響きわたった。時には、片道を九日間かけて京都の本山まで出かけ講義を行い、安政六年(一八五九)七十七才で亡くなるまで、仏の教を広めるための活動を行った。

後に生前の功績を本山から認められ、「勸学」の位が贈られた。新湊市内では、数少い一人である。その持浄が残した書物を世のために伝えたいと、経蔵が建てられ現在も大切に保存されている。

(三) 藪波浄慧

事蹟

- 明治 九年 一月  
石川県勸業場一年卒業。
- 明治一〇年 七月  
私費ヲ以テ高岡町ニ勸業教習所ヲ設立シ、生徒二十余名ヲ教ヘル。
- 明治一一年 二月  
射水郡二上村ニ薰成社ヲ創シ、米・麦・蔬菜試験所ノ主任トナル。
- 明治一六年  
滝水薰什等ト謀リ、愛護会ヲ設立、米麦作ノ改良ニアタリ、加盟ノ十数ヶ町村ニ農事試験場ヲ置キ、教師招聘、講習会ヲ開ク。
- 明治一八〇九年  
滝水薰什等ト蚕業振興ノタメ、桑苗数万本ヲ購入シ、各村二分与スル。
- 明治二〇年  
私費ヲ以テ養蚕伝習所ヲ藪田村ニ設立シ、郡民ノ篤志者ヲ教習ス。
- 明治二一年  
射水郡塚原村、藪田村ニ進徳会ヲ作り、農事改良・機業・花筵業ヲ奨励、會員四百余名ニ達ス。
- 明治二二年  
福島県耶馬郡北方町・猪苗代町、其ノ他村々ノ蚕糸業ヲ視察。
- 明治二三年  
愛知・三重・静岡県ノ産業視察。
- 明治二四年  
山口県ノ産業ヲ視察。
- 明治二五年  
私費ヲ以テ製糸伝習所ヲ設ケ教師ヲ招キ、工女ヲ養成。
- 同  
有志ト氷見郡農会ヲ創設。
- 明治二六年 八月  
岡山県磯崎製筵会社ヲ始メ、同県各地ノ花筵・麦稗真田製塩業視察。
- 同  
富山県知事ヨリ農会創立委員ヲ囑託セラル。
- 同  
群馬県徳江製糸所・栃木県荒荒粉養蚕場・西ヶ原養蚕伝習所等視察。
- 同  
桑園開拓ノ実施調査ノタメ、那須野原ヲ視察。
- 同  
藪田村農会ヲ設立シ会長ニナル。
- 明治二七年 七月  
私費ヲ似テ氷見郷繭品評会ヲ開設。



同

明治二八年

同

京都府各種実業ヲ視察シ、合ハセテ奈良県下ノ茶業・山林視察、マタ和歌山  
県ノ綿業・柑橘・山林・蚕糸・製塩ヲ視察。

石川県下ヲ視察シ、機業・製糸・撚糸・畜産・園芸・陶器等調査。

富山県農会評議員トナル。

富山県農会・氷見農会代表トシテ全国実業大会ニ出席。

—— 以上富山県史近代より ——

## 塚原と浄慧

塚原地域は湿田・半湿田の多い典型的な稲の単作地帯で、農業の収入は米の売却のみであった。

日露戦争後の米価の低迷は、農家の経済を苦しめ小作農の多い当地区の農家に厳しいものがあり、射水郡に約六〇〇〇戸の農家があったが、その七〇%以上の四四〇〇戸に負債があり、一戸平均九〇余円で、利子も年一割五分と高いものであった。

浄慧は、射水郡塚原村朴木覚円寺青木乗念の二男として生まれ、十七才で氷見庄藪田村（現氷見市）光福寺に入寺した。浄慧は、若くして高岡の学塾待賢室に学び、京都で研鑽を積み、真宗教団の改革運動を進めた。滴水薰什とともに宗教と産業の一体化を目指し、富山県農会・氷見郷農会代表として東京の全国大会に参加するなど、農事改良の指導者として活躍した。

農民に対し、米作の外塚原の土地に見合った副業として、彫刻漆器、金彫刻、窯業、杉苗、孟宗竹、柿、牛蒡、胡蘿蔔、藁草の栽培、畳表や花筵、絹織物など新しい農業改良技術の導入を進め、農村の活性化に力を注いだ。大部分の農家で行われたのは、藁工品の生産である。冬の農閑期には、家族全員で朝早くから夜遅くまで、草鞋・草履・筵・繩を藁で作って作り明治末に銀坊主を多く栽培するようになり良質の藁が生産されたので、当地域の藁工品は評価が高く、農家は現金収入を得ることが出来た。湿田地域では、裏作として藁草の栽培が行われた。

藺草として売るより、それを使って畳表や花筵を作った方が収入になったので、射水郡藺筵業組合を作ったり、藺筵伝習所を作って勸業に努めた。

明治二十九年塚原村朴木の舟木直次郎は藺草苗を石川県小松より取り寄せ研究、結果は良好で米作より収入が多かった。舟木直次郎は花筵を織りそれを世に出した。

明治三十一年塚原村朴木の村田和吉は、自宅で木彫刻を開業し、同三十七年には新湊町佐賀宗太郎・竹内友太郎がこれに漆を塗り彫刻漆器として販売した。盆・硯筥・巻煙草入・火鉢・煙草盆等その品質堅牢で古雅なるもので珍重された。

朴木焼は、登窯で砺波市福山にあった焼窯を参考にして窯築された窯で焼かれたものである。富山県知事から明治三十四年十二月に明石藤蔵が許可を受け、この地で焼き物を始めたのである。

この窯での生産品は、花瓶、徳利であり、加賀城下の骨がめも引き受けて出荷されていた。明治三十九年塚原村朴木の川西栄作、東京の某金彫家に師事して開業した。

明治後期には、羽二重の生産が盛んで、蚕を飼ひ絹糸にして織り上げたといわれる。覚円寺前の村田長松さんの家に大きな桑の木が近年まであったことからうかがわれる。

村田善市さんの家で藪田へ花筵織りなどを勉強しに行っていた事を記した文書がある。藺草で作られた莫産がある。

藪波浄慧は出生地の朴木（塚原村）に貢献、努力したことが文書、文献からうかがうことができる。会員が建てた二人の名を刻む顕彰碑が朴木公民館前にある。

### 覚円寺についての今後の調査課題

- ① 覚円寺の由来書の中で 傍線の方が存在するか否かを調査する事が必要である。
- ② 了円と初代宗悟との一二〇年の空白期間をどう考えるか。
- ③ 和尚大徳（開創者）についての調査。

## 二、高木山 覺正寺

### (一) 高木山略縁起

抑々、当寺之尋濫觴、昔真言宗而累代遼貌之蓮社也、俗伝名伽藍堂今高木正八幡者即寺内守護神也、凡從真言開起以來歴六百餘歳云々、中古為兵乱悉破滅而渺茫、僅為一字穿破、風雨壁雖漫照、月光寺中無絶大日金胎之妙行也、

然寺主空応適、蓮如上人之依化導、皈入選択本願、捨顯密之行法、遁聖道難修之、嶮路逆惡摂取趣易道、勸自他門徒皈願頂礼、阿弥陀仏之尊像、蓮如上人之従夫以來、日日増月月盛也、御免御裏失是偏他力弘願之妙由、祖師知識之貞徳也故、尽未來際無断絶也、仍先祖改遺跡如斯、  
不次

、尔時宝曆十二年歳南呂下旬

そもそも、当寺の始まりは真言宗で、遙か昔から累代、その蓮社であつた。正八幡を守護神としていた。真言開基より六百年余りといわれる。中古の戦乱により、伽藍は壊れ草原になつてしまひ一字だけ残つていたが、それも風雨に曝され破れ屋となつた。月光寺といい、金胎の行に従つていた。寺主空応の時、蓮如上人に帰依し、顯密の行を捨て、他力本願を選んだ。阿弥陀仏を信じ、似来日々月々に寺が復興するようになった。これも他力弘願の妙であり祖師の徳である。先祖以来の由緒は、このようである。

時宝曆十二年八月下旬

当寺住職次第 空応 慶祐 慶仁 慶受 慶善 全以 全照 恵春 義応 妙意 大恵 佳 新発

諦成 乗誓 恵往 瑞恵

沙門慶応敬白、仰願殊請蒙、貴賤男女助成而再建、高木山之靈地再建等勤行二世安穩之大利、夫以導師御  
積真如廣大、火宅無辺、文雖有生因、仏性之仮名、煩惱之妄厚覆翳無明業障之峰、以本有靈月幽而、未  
頭三毒五欲大虛痛哉、仏日早來没、生死流転、衢冥冥也、日負恩違義無、有報償之心、貧窮困乏不能、復  
得華較縱奪放恣遊散串數唐得用自賑給、溺酒溺色無義無礼、惡心増盛也、豈是免閻魔王業鏡獄卒之責乎

爰不肖適遂産黒河不思議之宿有縁、今当寺為住職、雖飾法衣惡業猶逞、不思仏祖廣大之深恩悲哉、再皈  
三塗火護、長廻四生之苦輪、是故大聖隠於西化遥三千余歳、隔山海万億道、此雖生日、城数千軸之経卷者  
西天同豈不絶喜乎、軸軸明仏種、随縁至誠無不倒菩提也、不妄逢応開弘願大悲之本誓、他力信心法、祖知  
識、逢勸戒喜教化、喜中悦、覺無量生死重昏、元上妙果之彼岸也、是故不肖無常勸門落涙、勸門徒共、為  
住安樂之宝蓮、夫高木山者、本真言之靈場而、数世金胎兩部汲奥義、累代遼貌之蓮社也、中古為兵乱破壊  
渺范而僅為一字、穿破風雨壁、靈月漫照院裏、呼悲哉、然其後皈入浄土真宗、以来凡十世也、不肖希為住  
職、未調寺中頗多也、故今再興大誓也、尚クハ遠近里氏緇素合心垂助成、昔上宮王子為玉フ木請馳数万之  
馳、一夜穿堀者通路自在也、熟機合心無不成事、王子西方救世大士而富貴也、不妄下里巴人而五欲縛地之  
愚凡也、雖然所願者三宝之靈、豈虚乎、誠縁覺施乾飯、早女者尊貴之感果報、匿王施三錢、功德九十却、  
感天果余報、得方六丁金、不妄雖為底下凡夫、身飾法衣為無信似鸚鵡、口述如来之金言也、有口施主功能  
何不疑乎、故名祠堂、満足対願一年七日七夜為修業法会令絶末代也、唯□平安樂真門之台、仍勸進之趣蓋  
如斯、

尔時明和五子歳正月月中旬

十世住 牛谷料倚沙門 釈惠応 敬写

寛永六年寅五月上旬

十一世住 林応沙門 釈惠明 拜見

(十世住 釈惠応は、沙門慶応敬白の慶応で、当寺住職次第の恵往でないかと思われる)

(二) 覚正寺由来につき書き上げ

石川県下越中国第四区小四区射水郡川口村四十二番地所

真宗東派覚正寺

京都府下京第三十区常葉町東派本願寺

空応、但同郡村 姓名不詳

年号干支等相知不申、

当寺ノ濫觴、真言宗ニテ累代金胎之行ヲ修シ、宇伽藍堂今高木正八幡者、即寺内ノ護神、月光寺ト称シ凡真言宗開基ヨリ三百余歳ヲ径テ、空応法師、蓮如上人之化導ニヨリテ顕密ノ行法ヲ捨テ、選択本願逆惡撰取之願海ニ入シ、阿弥陀仏ノ尊像ヲ頂戴、蓮如上人自ラ御裏ニ覚正寺ト御免被成下、中古兵乱為ニ悉破滅ス、当寺遺跡如斯、

当寺の始めは真言宗で、累代に亘つて金胎の行を行つてきました。高木正八幡は、寺内の護神で、月光寺と称していました。真言宗開基から三百年余りたつた空応法師の時に、蓮如上人に帰依し、真言宗から浄土真宗に改宗しました。蓮如上人から阿弥陀仏像をいただき、その裏に覚正寺と書かれたので、それを寺号としました。中古の時に兵乱のために月光寺の伽藍は、ことごとく壊れてしまいました。当寺の由緒は、このようであります。

一、本尊

一、堂宇

阿弥陀仏立像 行基菩薩御作

本堂 四十四坪 庫裏 五十九坪

経蔵 六坪

一、じゅう宝物 仏貫代画像 御裏不詳

一、寄附物 羅網、須弥檀尉、中尊卓、花車花、金灯笼 本尊両輪灯、五具足、開山前両輪灯、同卓、

同三具足、御代前三具足、太子高僧前三具足、香盤二ツ、平鑿、土香炉、御仏具三ツ、紫幕

二張り、錦地打敷四枚、御経一部、御伝鈔上下二卷、

一、現境内地 三百四十六坪五分

貢米八斗六升六合三夕

受地内訳

墓地

五千六十六番 三畝七步 長朔寺

五千六十七番 一畝三步 長朔寺

五千六十八番 四畝步 柳豊次郎

五千六十九番 四畝二十四步 高井源四郎

五千七十番 十七步 自運寺

五千七十一番 二畝十一步 中島与助

田畑、山林無之(田畑、山林はありません)

一、檀家 八拾戸

一、住職 明治四年辛未十月十七日被申渡

教導職試補 明治八年九月十八日申付

右之通り相違無御座候也、 右寺住職

明治十一年六月 教導職試補 二山深正

当六月

檀家総代

### 三、古老に聞く

#### (一) 川口

##### 院内から発掘された金銅仏阿弥陀仏如来像（金 清八氏蔵）

この阿弥陀仏如来像は、川口の院内という地名の田圃から発掘された金銅仏で大きさは約三寸位、年代は約八百年前の仏像と思われる。正確には仏像に詳しい専門家の鑑定が必要であろう。発掘された阿弥陀仏如来像は、四百五十年前の朝鮮製のものと思われる甕の中に古銭と一緒に入っていたと伝えられている。掘り出されたのはいつごろであるか不明であるが、円徳寺より明治三十年ごろに譲り受け今日まで金家に伝わったものである。

院内の地名は、昔から院内畑と言つて稲積家（床屋）の後方で地面の比較的高い所であり、昔の住居跡ではないかと考えられる。

また、院内という地名は、昔から寺との深い関係でつけられたものであると考えられ、川口の覚正寺や法渡寺等とどのような関係があつたのか今後調査研究する必要がある。

##### 諏訪木神社（すわのき）の元朝祭と祭礼について

川口の元朝祭は、いつの頃からかはわからないが浄土真宗の高木山覚正寺と総洞宗の谷昌寺と一緒に偈文を読んで新年の祝詞をあげている。神仏混淆の時代の名残りであろうと考えられるが全国的にも非常に珍しい形態をとっている元朝祭ではないだろうか。

高木山覚正寺御堂左端には高木八幡宮の御神体が安置されており、近年まで祭りになると高木秋生宅より赤飯を蒸して御神体に御供えし覚正寺住職にお経をあげてもらっていたことがあり、ここにも神仏混淆の足跡があつた。

また、諏訪木神社は、大正九年四月十三日に高木八幡宮と神明社が合祀執行され神社名を諏訪木と改称

し現在に至っている。

川口の祭りは、明治十八年頃の記録には春季大祭は四月十四日秋季大祭は九月六日に行われていたようであり、明治二十三年に塚原村が発足した時、当時塚原六ヶ村で一番格式の高い宮を持つ川口の祭りに合わせ、今日の春祭は四月十四日になったのであろう。それまでは、かならずしも統一されておらずそれぞれ祭りを行っていたと思われる。

また、秋季大祭については、この射水野地区は九月六日であったのではないかと推測される。このことは大島町の北野・若杉等の地区が今日でも十月六日に秋祭りを行っており、一か月のずれはあるものの六日という共通した秋祭りの何らかのいわれがあったのではないかと考えられる。

今日、秋季大祭は十月十四日となっているが、どのような理由から十四日になったのかはわからない。たぶん収穫期の時期や道神社等の都合によるものではないかと推測される。

また、春季大祭には道神社、秋季大祭には西宮が担当し祭礼を行っている。

### 塚原村に関する資料（故帯刀嘉之助氏所蔵）

塚原村役場の関係文書は、高井源四郎さんの蔵にあったものの一部を故帯刀嘉之助氏が保存していたものである。

この文書は、塚原の明治時代の歴史を知る上で貴重な資料であり、末永く大切に保存し、今後、調査研究していく必要がある。とくに、租税の項目等から今の時代では考えられない魚釣りを生活の一部として生計をたてていたことが記帳してあるなど、当時の生活実態やどのような家屋があったのかをうかがい知ることができる。

「庄川河川大改修と河川敷の開墾」及び「北海道への移民について」は、今後の調査研究の対象として取り組んでみたいと考えており、塚原地区の皆様方にご協力をいただき関係資料があれば提供及び情報を聞かせていただきたい。



## (二) 朴木

### 朴木焼と木工品

朴木焼は砺波の福山にあった窯（登窯）にならって明石藤造氏が造り、明治三十四年富山県知事の許可を得て朴木で焼き物を始めたものである。入り口の窯は袋窯で八畳ほどの大きさ、その次が第一の立窯、第二の立窯は立っていて煙り抜きがついたものである。焼き物を造る粘土は、すぐ前の田圃の在家（字名）から採っていた。

この窯での生産品は、花瓶、徳利、壺、などであり、加賀城下の骨甕も引き受けて出荷されていた。場所は現在明石直機住宅の敷地になっている。窯の構築費は、約百石の米価（当時の米価一石十一〜十二円）に相当したと言う。

明治時代、神楽川沿いに朴ノ木が高嶋川合流点から大用（おおよ）の方まで植えてあった。その朴ノ木を利用し当時から木工品が造られていた。木工品はアメリカへの輸出用であり、シカゴで博覧会があったとき出品された。

昭和十一年四月、満州と日本とで行き来が盛んになるだろうと、富山市で日満産業博覧会が開かれ、日本と満州の特産品の展示があり、赤い鯛（漆塗り）も出品され、当時としては立派なものとして注目を集めた。

木工品は明治三十一年村田和吉、和助兄弟が習ってきて、自宅で行い新湊佐賀宗太郎がこれに漆を塗り彫刻漆器として販売した。盆・硯筒（すずりばこ）・火鉢・煙草盆などを生産していた。舟木忠道、東田道夫氏がその伝統を受け継いでいる。東田氏は伝統工芸士として承認を受け、現在も行われている。

# 藺草・花ござ

(村田和左衛門「諸記」より)

明治二十七年ヨリ、当村ニ藺草二着(付)テ伝習ヲ受ケ、和左衛門妻さつト七左衛門ノ娘はるト二名デ、氷見郡大字新保村億念寺へ四ケ月下宿シテ伝習ヲ請ケ、其後村内ニ諭教シテ、一村業ニ着キ、尚又進テ三十年八月二老人機械一台ヲ求メ、凶書キ釘ウツ藺染伝習、和左衛門請ケ、織立八舟木ソト、森トキ、森スノ、村田さつ四名織方伝習受、浮模様ト八月一日ヨリ三十日マテ老ケ月二悉皆受ケ伝テ後子、三十四一年七月二機械三台求メ、内老台和左衛門米代金二十三円五十錢也、元ノ老台ト四台ニ相成リ候也、

元来右ノ業ト言フ物ハ、明治二十一年ヨリ藪波浄慧、瀧水薰什両僧ノ教諭ヨリ、進徳教会ヲ開キ、毎月当村森キ夕様方へ出張ニテ会ヲ開キ仏教演説、説教等有之、信俗二傍ノ教ヘニテ、終ニ富山県農會品評會ニ藺草ヲ出品ニテ三等賞受ケ木杯老個、四等賞陶盃老個ヲ受ケ候也、

三十一年十一月二十五日ヨリ十二月五日マテ富山県第一回農會品評會ニテ藺草ニテ三等賞三十二年二月花筵織立職場建テ、惣金六十二円、十人ニテ合資ステ、六円二十錢出金仕候也、

三十三年、第七連合共進會ヲ富山県ニテ七月、八月ト開設シ、花筵出品シテ六等賞受ケ木杯老個ヲ拜納ス、郡農會小杉ニテ品評會開キ、米・藺草・花筵等出品シテ、三等賞ヲ受ケ木杯式個拜納ス、

射水郡誌に

「明治二十九年、塚原村舟木直次郎、藺草を小松より求め、栽培方法を研究せり、一としていて、射水郡に藺草の栽培が始まったのは、明治二十九年のように記されて、いるが、村田家文書では、明治二十七年に藺草の織り方の伝習を氷見郡新保村で受けたとして、いる。藺草が初めて栽培されたのは、明治二十一年以降で同二十七年以前となる。材料の藺草で売るより、製品の藺草として付加価値を付け、収入の増加を図つたのである。勸業僧の藪波浄慧師の努力と農家の収入増を願う熱意が偲ばれる。当時織られた花ござが、今も村田家に保存されている。」

### (三) 沖塚原

#### 福禱社

大島村史(大島村役場、昭和38・9・30発行)六八四ページに、

正徳年間の「社号帳」に、『福戸社』は、「神社明細帳」では、『福禱社』となっている。と、今開発の福戸社について記述している。さらに、

この近くでは、小杉三ヶに二社、沖塚原村に一社『福戸社』がある。と、述べている。

沖塚原の明治七年から同八年にかけて行われた、地券交付のための御田地取調帳の畑についての箇所には、福戸社横として書き、歩数とその地の所有者が記されている。その畑の所有者の家が、その畑に隣接しており、その地は、現在の神明社の東側に相当する。

『福戸社』の御祭神は、大名牟遲神(おなむちのかみ)である。出雲系の御祭神で、大日貴命とも書かれる神である。

福戸は、ふくべとも読まれ、ふくべとは瓢箪のことで、水になかなか沈まぬことから、霊が宿るものとして信仰したものだと思われる。ふくべ(瓢箪)は、水の神の暴威を防ぐ力があるとして祀られた。沖塚原の地名にふさわしい神社であったといえよう。

沖塚原の神明社には、神明社の御祭神の大日如来像(天照皇大神の本地垂迹)と観音像(白山社の菊理媛命)の二体が安置されているが、福戸社の御神体と思われるものは現存しない。

福戸社は明治七年に神明社に合祀されていることから、地券取調帳に記載された以後になくなって、その後俗称の字福戸社横も消えていったのであろう。

## ダント場

ダント場と呼ばれる場所が集落の北東にある。その場所は、百坪（三三〇平方米）前後で、土地の周囲に墓があり、中央部は、空地となり雑木が自然のまま育っている。

ダント場は、らんと場、書き替えると「卵塔場」が転訛したものである。卵塔場とは、火葬場のことであり、その周囲に墓が多く並んでいることから、その言葉の由来もうなづける。

沖塚原の集落の形成は、西南の比較的標高（二・六メートル）のある所から始まり、順次北と西へ広がっていった。L形の集落になったと思われる。ダント場で死者を火葬にする時、その煙が北東や北の風が吹いても、余り集落への影響が無かったが、集落が東へ伸びてダント場の南西から南にかけて家が建つようになると特異な臭いのある煙が、それらの家へ吹き込むことになり、迷惑ということで、後（火葬が普遍化する明治の初期と推定）に集落の南東の箇所へ移転した。この火葬場は、耕地整理の際に無くなり、現在は農地になっている。

ダント場に、「キンゲンサマの墓」があつたといわれているが、その場所はどこであるのか明確でない。キンゲンを勤王方の武士とする人があるが、キンゲンを公卿とする説もあり、牧野に流浪した宗良親王の側近の者の墓という考え方もある。

## ハカンド

石黒信由の絵図に、現在の太島町中野から寺塚原と沖塚原の間を抜け、松木を抜けて放生津町を通る浜海道に至る道が書かれている。書かれている道の周辺の沖塚原の田地を「ハカンド」と呼んでいた。浜海道への間道ということが、浜間道（はまかんど）と呼ばれ「はかんど」そして「ハカンド」になつていったと考えられる。

大門町水戸田に「ヤカンド」と呼ばれる所がある。山間道（やまかんど）をそういつたとしている。これと同じように変化したものであろう。

## 付録 塚原に関する資料

### ◎ 帯刀氏所有文書

一、明治参拾六年度国税金（田租） 収納簿、二、明治参拾六年度授業料徴収台帳、三、明治参拾六年度県税（戸数割） 収納台帳、四、明治四十年年度国税金（田租） 収納台帳、五、明治四十年年度県税（戸数割） 収納台帳、六、明治四十年年度県税（地租割） 収納台帳、七、明治四十年度村税地価割賦課台帳、八、明治四十年度村税戸別割賦課台帳、九、明治四十年度国税（所得税） 収納簿、一〇、明治四十年度国税（郡村宅地雑地租） 収納簿、一一、明治四十一年（塚原村会） 原案、明治四十一年度県税戸数割賦課額等級案塚原村明治四十一年度歳入出予算案、塚原村明治四十年度歳入出決算表、一二、明治四十一年営業台帳除去簿（明治四十一年から大正七年まで記入）、一三、明治四十年度村税営業割賦課台帳、一四、県村税賦課用一人別畑地租額調査簿、一五、明治四十三年度村税地価割賦課台帳（田畑ノ分）、一六、明治四十三年度督促手数料徴収簿、一七、明治四十三年度県税（戸数割） 収納台帳、一八、明治四十三年度村税戸別割賦課台帳、一九、大正四年度国税金（所得税） 収納簿、二〇、大正四年度国税金（自家用醬油税） 収納簿、二一、大正四年度手数料徴収台帳、二二、大正四年度収入簿、二三、大正四年度県税・村税（戸数割） 併記収納台帳、二四、大正四年度県税・村税（其他土地々租割）、二五、大正四年度国税（畑、雑地租） 収納簿、二六、大正四年度物品購入決裁簿、

### ◎ 岡部家文書（新湊市教育委員会所有）

一、明治二十九年年度塚原村決議書綴、二、明治三十年度塚原村決議書、三、明治三十二年度塚原村決議書、四、川口村・宮袋村共有地打立並二合盛帳、五、庄川改修に掛り川口村・宮袋村入会地内収用土地品物取調記録帳、六、川口村・宮袋村入会地年度決算万雑差引受払帳、七、村方万雑費受払帳、八、牧野用

水八百野下流人夫控書、七、口村・宮袋村入会地二ヶ半地租額一人別帳、八、免有地等川敷決定記録帳、九、明治四十三年度河敷使用料領収書、九、明治四十三年度諸人夫並出物金取替帳、一〇、明治四十三年度牧野用水万造調帳、一一、明治四十四年度牧野用水下流排水土盛人夫控書、一二、七ヶ用水水門作料書付、一三、牧野用水番人出面帳、その他五〇点

◎ 浦上家文書 (浦上次郎氏所有)

未整理、先々代和右衛門(塚原村初代・五代村長)記録(三二分校費、朴木事件結局マテ費用取調、等)先々代宛二代塚原村長高井茂之書簡、先代和右衛門(塚原村一五代・一七代村長)宛六代塚原村長塚本謙三書簡等多数、点数不明、

◎ 岸与三平文書

未整理、大正・昭和期の塚原村議会議決書、予算書等、約一五〇点

◎ 高井源四郎文書(富山県公文書館所有)

約三〇〇〇点と言われている。高井源四郎は、富山県会議員、塚原村長を務めた。

◎ 塚原村地籍図(新湊市教育委員会所有)

寺塚原・松木・川口宮袋入会地の字別地籍図、用水路図、明治三十三年塚原小学校増築平面図等約五〇点ある。

## 発刊にあたって

「故きを温ねて、新しきを知る」（温故知新）

平成九年三月、新湊市史編纂委員の、山崎為雄先生を中心に「塚原の歴史の会」を設立して発足する。二か年計画で、塚原のお寺巡りと古老の話聞いた。お寺の過去帳を見せてもらって住職の話を録音したり、所蔵品を写真に撮ったりと史実を基に古老の話を交えて興味深くまとめられている。

今までに、「塚原の郷土史」の発刊資料として、次のものがある。

一、塚原の教育百年史 昭和五十一年九月 編集

（塚原小学校創校百年記念事業協賛会発行）

内容は、教育史を中心になっているが、村史的記述も入れて親しみのある編集になっている。

二、塚原と庄川の伝承史 平成四年三月 編集

（郷土文化の再発見活動 塚原公民館発行）

内容は、庄川と塚原村落の深いかかわりをまとめ、塚原にまつわる伝承を記述してある。

新湊市立塚原公民館長 浦上 幸雄

## あとがき

塚原公民館を拠点にして、生まれ育った郷土「塚原」をもっと語り伝える資料がほしいと立ち上がって二年有余の月日が流れる。

会員はお互いに職を持つ関係から調査・踏査におのずと時間的制約を受ける。

寺院については、朴木の青木山覚円寺・宮袋の禅楽寺・川口の高木山覚正寺・同谷昌寺の三ヶ所寺を中心に踏査した。

訪問する際には、住職を交え、寺の家譜を聴きながら建築様式や仏像の由来などを調査した。後日資料に基づき検討を重ねた。

調査を終えてない寺院については、計画を立てて訪問したいと思っております。ご協力方お願いします。

計画にそって調査しているうちに、集落の由来や歴史的な事実が次代の若者に伝承されていないことに気づき、急きよ年寄りの方から村の伝承を聞くことに変更せざるをえなかった。

聞き取り調査は、公民館や古老の家に五く六人集まってもらい自由に話しを進める形態をとり、記録にとどめるように努めている。機会をみて、歴史的考察を加え、「塚原地域」の資料としたい。

ここに、二年余り調査したことを中間発表の形で発刊いたしましたので、皆様の温かい指導と叱責を乞うものであります。



# 會員名簿

(五〇音順)  
青木一彦 浦上幸雄 勝山敏一 岡本哲昭 栢島道司 柏島道浩 北村外雄 小泉多喜子 高木秋生 高原芳樹 竹脇良孝 前多キミ子 前多俊彦 松井芳子 明神見津 山崎為雄

発行者

新湊市立塚原公民館  
塚原歴史の会

発行日

平成十一年三月三日

印刷所

谷口印刷

